

文化高知

2006年7月 NO.132



「咲」 長野 豊秋

<もくじ>

岡豊山は高知県立歴史民俗資料館	宅間一之	2
絵金と近松門左衛門	笠井賢一	3
ファーガソンがやってくる	山手敏和	4~5
土佐ならではの巡回展		
-大河ドラマ「功名が辻」特別展		
「山内一豊とその妻」高知展開催に向けて	藤田雅子	6~7
高知の女性の生活史		
「ひとくちに話せる人生じゃあない」はこうしてできた		
~実行委員会三年間の記録抄~	古谷滋子	8~9
夏季大学事始からのあれこれ	清水峯雄	10~11
固定展示のリニューアル	田所菜穂子	12
4~6月の事業のご報告		13
風俗歳時記・風伯		14~15

(財)高知市文化振興事業団

岡豊山は 高知県立歴史民俗資料館

宅間 一之

四国の覇者長宗我部元親の名は今も歴史上に輝いています。その長宗我部氏の拠点岡豊城に県立歴史民俗資料館があります。敷地も曲輪の一つであったかも知れません。城跡の資料館にふさわしく中世・長宗我部氏関係資料を中心に、土佐の歴史や文化解明の資料収集と調査研究、そしてその成果を公開展示して十五年の歳月が流れました。おかげさまで高知県内の方々からはふるさと文化の拠点としてひろく活用され、また県外の方々には土佐の歴史ロマンが堪能できる施設として評価を得て参りました。

城跡は資料館建設に係わって六次にわたって発掘調査が行われました。詰ノ段からは石敷遺構や礎石建物跡、それに地鎮の跡なども確認され、天守を思わせる重層の建物の存在も想定させました。三ノ段からは土塁や石垣、礎石建物跡に階段状の遺構な

岡豊山には美しい自然とすばらしい歴史の眺望があります。春は桜花の嵐、やがて目にしむ新緑から夏の木陰、吹き抜ける涼風は自然の匂いを添えて過ぎていきます。秋は紅葉から落葉の絨毯へと移っていきます。四季折々の草花も可憐な花を付けて人の心を和ませます。

城跡の北は重なる北山、参勤交代の道はこの山を越えます。手前の高速度路脇には、土佐の夜明けを告げた奥谷南遺跡、そして長畝の前期古墳、巨石の小蓮古墳から舟岩の群集墳と遺跡はつながって考古の世界に誘います。

東眼下の流れは国分川、国分寺の森に土佐国衛跡、紀貫之邸跡に比江廃寺跡などを残す土佐のまほろばを抱き込むように、いまでも雅の風情を漂わせて流れます。長岡台地から土佐山田へ広がる後期弥生の集落群の先は龍河洞です。

南の斜面には伝家老屋敷跡があり、近年の発掘は国分川のほとりに城への登り口大手門も推定させました。長宗我部の家臣吉田氏の吉田土居も往事を残してすぐそこです。南四国最大の弥生の拠点集落田村遺跡群のさきには、太平洋の波頭もかすんで見えます。

西は本城の出丸伝馬跡曲輪、その

先は貫之船出の大江、そこからは新興の住宅が近世高知の城下へとつながっていきます。目線で切られた樹木越しに開ける歴史の風景、これに高知県立歴史民俗資料館の建物を加えた歴史の眺望は、この地以外でのぞむことは不可能でしょう。

岡豊山には説得力ある歴史の証言と、感動を呼ぶ自然と歴史の眺望があります。そこは殺伐とした戦国の城跡であっても、自然界の演出が戦いの歴史は忘れさせ、人の心を癒し歴史のロマンにひたさせます。

私の岡豊山への最初の登城は昭和三十年五月、草生い繁る荒城でした。以来巡検に、開発・保存の調整そして調査、城跡学習の案内にと登った回数はいくらも記憶にはありません。しかしこれからの毎日は今までは違った深い係わりをもちながら、自然と城、歴史と人がおりなす協奏の曲にひたりつつ、公共施設としての歴史民俗資料館が「もっと身近に、もっと楽しく」その使命遂行の策を思案しながらの登城となります。

（たくまかずゆき／高知県立歴史民俗資料館新館長）

絵金と近松門左衛門

笠井賢一

土佐の絵師絵金の存在を知って三十数年になる。ちょうど歌舞伎の八世坂東三津五郎丈の秘書として、著作の助手をしていた頃であった。それは一九六〇年代の末から七〇年代のはじめにかけての、時代の大きな転換点であった。

幕末という動乱期に、髪結いの俵が絵の才能によって、江戸で狩野派を学び、若くして土佐藩の御用絵師となる。やがて贋作事件の当事者となり、御用絵師の地位を剥奪され、流浪の果てに、強烈な色彩とダイナミックで緊迫感にあふれた劇的な構図の芝居絵を描く町の絵師、絵金となって明治まで生きた男。彼の生き様は私達に強烈な印象を残した。河原乞食という言葉がアングラ芝居（アングラグランド演劇）のキーワードとして語られた時代であった。

そのころ私は演劇の確かな根柢を求めて、現代演劇から逆に古典芸能の世界にはいり、歌舞伎の仕事をし



ていた。私は高知にこんなにも激しい生き方をした男がいたのかという思いがした。絵金の絵の実物を見た事が無く、図録で見ただけであったが、それだけでも充分過ぎるほど強烈な世界であった。その後、平成八年高知県立美術館で絵金の展覧会があり初めて実物を見る事が出来た。それ以来、私は祭礼に飾られ、庶民の眼を奪った実際の絵金の絵を見たと思うようになった。赤岡の七月の第三土曜、日曜の絵金祭りや、高知の朝倉神社の七月二十四日の祭礼に台提灯に飾られる絵金である。しかし東京での日々の仕事に追われ、なかなかスケジュールが折り合わなかった。

昨年高知新聞に「芸能の力―言霊の芸能史」を連載したご縁で、今年の七月二十三日の高知県能楽鑑賞会能の公演（番組は能「通小町」シテ友枝昭世・ツレ 粟谷能夫、他）の解説をさせて頂くことになった。そ

のお蔭で翌日の二十四日の朝倉神社の絵金の芝居絵が見られることになった。そこには、絵金の代表作の一つと云っていい、近松門左衛門作の「双生隅田川」が含まれている。近松の最晩年の充実した時期にかかれた時代物の傑作だ。

近松は武士の家に生れ、父の浪人により武門を離れ、公家に一時奉公したあと芝居の世界に身を投じた。武士から河原乞食に身を落としたのだ。実際一族の間では家の名を汚したと縁を断られたともいう。しかし近松は大阪の義太夫節の創始者竹本義太夫と組んで人形浄瑠璃の作者となり、また京都の歌舞伎役者の名優坂田藤十郎と組んで歌舞伎も書き、日本のシエイクスピアと呼ばれるほどの偉大な劇作家としての仕事を残した。近松は中世の芸能である能の世界を知り尽くしたうえで、それを近世の演劇、人形浄瑠璃・歌舞伎に変換し手渡した。能の狂女物の傑作「隅田川」を換骨奪胎してお家騒動の世界に置き換えて「双生隅田川」を書いたように。

一方絵金は庶民の出でありながら御用絵師の身分に上昇し、再び町の絵師として芝居絵を書き続けた。封建時代の身分制の大きな壁を突き破り、芸能を武器に戦ったという意味

では共通する二人である。

この「双生隅田川」の人買い惣太、自害の場面は、主君への罪滅ぼしのために人買いに身を落とした惣太が、主君の雙子の子供のうちの一人梅若をあやまって殺したと知って後悔し、もう一人の天狗にさらわれた松若を探し出すべく、天狗に生まれ変わろうと自害する強烈な場面である。芸能の根源的な力は鎮魂の力である。無残な死を迎えた魂は鎮められ、転生しなければならぬ。そのドラマの頂点が見事に捉えられた絵だ。近松の劇性と絵金の絵心が出会っている。夜の灯火のなかでこの絵がどのように見えるか、今から胸がときめいてならない。

（かさいけんいち／演出家・能楽プロデューサー）



「双生隅田川」

ファーガソンがやってくる

山手 敏和

おつとほんまにやるがかえ……しゃーないなあ……。

私はいやおうなしに三度目の決断をさせられた。

去年の夏のある日、安芸市にある某居酒屋でその話はあっさり決まってしまった。

ワールド・プロジェクト・ジャパン（今回のメイナード・ファーガソン・ジャパンツアーを企画した会社）の方より「二〇〇六年にメイナード・ファーガソンを日本に呼ぶので、受け皿のひとつになってくれないだろうか」という打診を受け、その善後策をメンバーで話し合っていた時だ。

メイナード・ファーガソン（一九二八～）は「ジャズの生きた伝説」と称される世界的なトランペット奏者で、映画「ロッキー」のテーマ曲「Gonna Fly Now」で一世を風靡、一九七八年にはグラミー賞にもノミネートされるなど、世界最高峰の実力を誇る、ジャズ界の巨頭である。

「成層圏を突き抜ける」ハイノート（高音）が有名で八年ぶりの来日となる。

私はこっそり当オーケストラのコンサートマスター藤林に聞いた。

「藤さん、どうぜえ……本意は。」

たいへんやき受けとつないろう？」
「いや、そんなことはない。なんとかよんでみたいなあ！」

即答であった。

その一言で「また、たいへんな事に足をつっこんでしまった」と思いつ、「まあええか」と腹を決めた。

決めた割にええかげんな事しかできない自分がある事にはとりあえず触れないで。

そもそも我がフェイク・ジャズ・オーケストラは安芸市内の中学吹奏楽の創生期OBのメンバーで一九八五年ごろに結成され、当時から「飽くなき音楽の追求を目指してきた（つもり）。熱き思いがつのり、目つきが悪くなり、音楽以前に敬遠されてきた青年も五十代のおじさんになってしまった。

一時、メンバーが三、四名しかおらず、一年間個人練習しかできなかった時もあったが、数年前に藤林潤（トランペット）がメンバーに入り、彼のリーダーシップのもと、本当の意味での音楽の追求が始まった。

決してそれまでええかげんにやってきたつもりはないのだが、彼の圧倒的な演奏力と音楽性をみるにつけ、「よし、あらためてよい音楽をやるぞ」と再び歩み始めたのだ。

藤林をコンサートマスターに迎えてのフェイクのリサイタルは今年でやっつと四回目となる。高橋達也氏（テナーサクソフーン）、エリック宮城氏（トランペット）といったトップ・プロとの共演でめきめきと力をつけ、その演奏はふた皮ばかりむけたようだ。

高橋達也氏は四国アマチュア・ビッグ・バンド連盟理事長であり、国内外で活躍するテナーサクソフーン奏者。日本でもっとも権威のあるジャズ雑誌「スウィング・ジャーナル」で二度の「日本ジャズ大賞」を受賞されるほどの実力者である。

また、エリック宮城氏はハワイ生まれのトランペット奏者で、バティ・リッチ、ウディー・ハーマンなどの有名バンドのリードトランペットとして世界で活躍。一九九五年に結成した「EM Band」を率いて、何度も来高する等、精力的な活動を続けている、こちらもトップ・クラスの演奏家だ。



御大、高橋達也氏は毎回口癖のように、「音楽をやるのにプロもアマもない」と言ってくれます。（そのとおり）

プロに挑戦するのではなく、フェイクはフェイクの音楽性を高めなければ……。リサイタルでは「フェイクの演奏だけで満席にするぞ！ ゲストはおまけ（失礼）」という意気込みで取り組んでいるけれど、道のりはきびしい。（今年にはトロンボーンの中川英二郎カルテットを迎え、十一月二十五日土曜日に夜須マリンホールでコンサートを行います。乞うご期待。）

話をもどって……。

一昨年の二回目のリサイタルを終えた直後、その話は届いた。

「日本へファーガソンを呼んだ」
「五公演ぐらいしたい」
「三公演は決定した」
「高知が受けてくれれば実現に向けて動き出す」



▶高橋達也

▶エリック宮城

と、上手く乗せられ、ついに決断せざるを得なくなりました。だあ……。さすがやるねえ、ワールドプロジェクト、まいったまいった。とは言うものの、フェイクだけの力で本当に高知公演が可能だろうか。一昨年、地元アーティストの演奏会でお世話になった高知市文化振興事業団に相談してみると、高知市文化プラザ活性化事業の一つとして、取り上げて頂けることとなった。そんなこんなで「ファーガソンがやってくる」ことになったのだが、コンサートマスターの藤林は、なんと本番の前日に菅平のジャズ・キャンプにメイナード・ファーガソンを聞きにいくという。（九月十七日には四国アマチュア・ビッグ・バンド・リーグ高知大会があるというのに）

どうやら「ファーガソン御一行」として行くつもりだろうか？……んなこたない。

ともあれ高知の熱い夏、二〇〇六年九月十九日「メイナード・ファーガソンバンド高知公演」は音楽に情熱をそそぐ一人の



ジャズ・キャンプ
高知市文化振興事業団

男の思いから始まった。先に紹介した高橋達也氏とエリック宮城氏もフロント・アクト（前座）として演奏するフェイク・ジャズ・オーケストラにゲスト出演が決まり、何とも豪華なメンバーによるコンサートが実現することになった。

フェイク・ジャズ・オーケストラもメイナード・ファーガソンバンドに胸を借りるつもりでがんばります。そしてまたまたひと皮むけてみたい所であります。

やまととしかず／フェイク・ジャズ・オーケストラ代表

Live in Concert Maynard Ferguson and his Big Bop Nouveau Band

メイナード・ファーガソンバンド高知公演

「ロッキーのテーマ」「スタートレックのテーマ」など、数々のヒット曲を生み出したハイ・ソング・ライター・トランペッター、待望の高知初公演。
Front Act Fake Jazz Orchestra with...
Tatsuya Takahashi (Tenor Sax)
Eric Miyashiro (Trumpet)

発売場所は高知市文化プラザミュージアムショップ、高知プレイガイド、高知大丸プレイガイド、高知県立美術館ミュージアムショップ、アルテックの各プレイガイドで発売中です。公演に関するお問い合わせは、財団法人高知市文化振興事業団企画事業課（TEL:〇八八・八八三・五〇七一）まで。

土佐ならではの巡回展

——大河ドラマ「功名が辻」特別展
「山内一豊とその妻」高知展開催に向けて

藤田雅子

大河ドラマ「功名が辻」の放送が今年一月から始まりました。高知県がドラマの主人公、山内一豊夫妻ゆかりの地として注目を集める中、四月には「土佐二十四万石博」も始まり、高知城下はいよいよにぎわいを見せています。

そんな中、七月十五日に高知県立文学館で始まる巡回展、「山内一豊とその妻」展の準備は着々と進められています。すでに昨年末から東京・静岡と巡回した展示は終わり、次に始まる高知での展示に向けて資料が徐々に高知へ集められる段階に入りました。

小さな資料館で仕事をする私たち職員が、こうした巡回展に準備段階から関わることは、滅多にない機会です。初めてづくしのことですから、ここで見て、経験する全てのこと新鮮です。仕事の感想をこんなふうにも書くことは、ちょっとおかしき気もしますが、展示の裏側をここで少

しご紹介することで、読んだ方々も少し違う角度から展示を楽しむことができるのではないかと思いますので、思うままに書き連ねることにします。

各地の博物館や美術館で開催されている企画展で巡回展というと、大ざっぱに言って「同じ展示を数カ所ですること」を意味します。同じ企画の展示を数カ所で行い、解説文や展示資料を共有することで、資料を借りる手間や搬送費、印刷費などを減らすことができるのです。また、これによって、自分の館では絶対に企画できないような展示も行えるようになるのです。例えばヨーロッパ・エジプトや中国など、海外の資料を使った企画展がよく巡回展になるのも、こうした理由が大きいのでしょう。

今まで私は、この巡回展の意味をそのように理解して、「どこで見て、実際にできあがったものを見てみると、これが同じ展示だろうかと思ってくらいに違ってくるのです。また各会場ともに、展示にあわせてレストランで特別メニューを用意したり、関連イベントを企画したりと、それぞれに工夫をこらした盛り上げ方をしています。これらも加わっていくと、もはや「どこでも同じ展示」などではなく、その館ならではの展示です。

さて、それでは、これから開催される高知展はどうなるのでしょうか。まだまだ未知数のところも多いですが、私はやはりこれまでのどの会場とも全く違う雰囲気での展示になるだろうと思います。

これまでに開催された各地での展示への反響を聞くと、県外で山内家伝来の資料が一同に公開された初めての機会であること、また従来武将達の活躍ばかりが注目される戦国時代にあって、時代を動かした当時の女性像にスポットをあてた、新たな切り口からの展覧会であること、といったところが評価につながっているようです。

とはいえ、まだまだ全国的にみると、山内一豊夫妻に対する知名度は決して高くはありません。戦前の教科書で一豊夫人の内助の功の話がとりあげられていたために、「懐かしい」という感想をもらす方々もいるものの、若い人たちにとっては歴史の教科書にも出てこない、藤堂高虎や武田信玄などのように華々しい話も聞かない、知っている方がむしろ珍しいような人物に入ってしまうのではないのでしょうか。また、ドラマもまだ始まったばかりの時期に行った展示ですから、まづどんな人物なのかを知ってもらおう、というところまで一苦労だったようです。

パネルを作って追加していました。「知りたい」という人達の興味関心に応えようという姿勢がはっきりと出ています。展示をイメージで表現すると、新聞に近い雰囲気でしょうか。

これに対して静岡展は、説明をしないということでは決してないのですが、例えば、展示台の上には資料しか乗せない、というルールで展示をします。するとどうでしょう、まず目に入るのは資料そのもので、視界に邪魔な物が入らずにゆっくりと眺めることができます。解説を読みたい人は手前に並べられた解説文に目を移し、そこでこの資料のいわれや歴史的な背景を知る、といった手順になります。まるで写真集を見るような印象の展示なのです。

こんなちょっとしたことでも、展示をする館の方針でずいぶん違った印象になります。これに展示室の広さや設備の違いなどもありますか

展示で、さらに一豊と子孫達が根付いた地・土佐で開催するのだから、「一豊って誰？」という素朴な疑問に答えるだけで済むはずがありません。一豊をはじめ、山内家のことを知っている人も、知らない人も、大人も子供も誰もが楽しめる展示でなくては、と職員全員で知恵をしぼっているところです。

ですから、きつと高知の展示も、他とは全く違う展示になることだろうと思います。それが新聞なのか、写真集なのか、どんなイメージの展示になるかは全く分かりませんが、きつと高知らしい展示になって皆さんの前に現れるはずですよ。ですから、他の会場でもう見たよ、という方も、ぜひもう一度高知で見てみて下さい。きつとまた新たな発見があると思いますよ。

（ふじたまさこ／土佐山内家宝物資料館学芸員）



▲高知展チラシ



▲東京展チラシ



▲静岡展チラシ

高知の女性の生活史 「ひとくちに話せる人生じゃあない」 はこうしてできた

～実行委員会三年間の記録抄～

〈連載第1回〉

古谷 滋子



「高知の女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃあない」

このたびは女性史の出版に対して、「第十六回高知出版学術賞」をいただき有難うございました。試行錯誤しながら出来た、二百五十余名の熱意の結晶が栄えある賞に認められたことは無上の喜びであります。また、「文化高知」の貴重なスペースをいただき、顛末記の連載をさせていただくことにも感謝を申し上げます。

◇始まりはこうだった 「知らぬが仏」

男女共同参画センター「ソーレ」の仕事に「調査・研究」があります。女性史を作れないかという漠然とした思いで佐藤基子高知短大教授をお訪ねしたのが平成十四年十一月。厳しいお話でした。高知の女性史の研究で出来ているのは自由民権ぐらいい、女性グループが昔の新聞記事の収集を始めているが、戦災で高知新聞が消失しているなどで遅々として進まない。やるとすれば大変な時間とお金、組織力が要りますが、覚悟は？と聞かれて仰天。それに、頼みの佐藤先生は三月で東京に帰られ研究者もいなくなるという。一縷の望みは、「聞き取りなら貴重な資料にもなりましょう」と。こりゃあどうも：という思いで引揚げてきました。

◇実行委員会ができた 愛称は「ミモザ」

平成十五年七月に実行委員会が立ち上がりました。イタリアでは三月

八日の国際女性デーに男性からミモザの花を贈ります。また、女性が始めてメーデーに参加した時にミモザの小枝を持ったことや「ソーレ」（イタリア語で太陽）の由来から、実行委員会を呼びやすく「ミモザ」としました。「男尊女卑の時代を生きた、歴史の表に出ることのなかった母や祖母の時代を記録して男女平等を深く考える機会にしよう。出来るのは今しかない」という思いで、具体的には、三年計画で庶民の聞き取りを中心に高知特有の女性の姿を引き出し、最後まで興味を持って読んでもらえる、そして安価でコンパクトな女性史を目指しました。コンパクトではなく大判になったのは参加くださった皆様の思いが熱かったからです、それ以外ではおおむね計画通りだったかなと自負をいたしております。

◇聞き取りは百人から

ブロックではそれぞれに、あの手の手で十五人余の聞き取りボランティアをお願いしていただきました。九十人の聞き手が決まった時「これ出来る！」と二度目の確信が持てました。それから後は皆様のやろうという熱い思いに背中を押されてきた

ように思います。「何で今女性史か」・「聞き取りのノウハウ」・「知っておきたい高齢者のこと」など、ブロックごとに研修を重ねながら、語り手は地域や職業が偏らないように、特別ではない当たり前に生きてきた八十歳以上の女性百人を選んでゆきました。喧々諤々の議論をしながら、毎月ブロック会を開くところもありました。その時、県内には八十歳以上の女性が三二、六六〇人もおいででした。男性は一四、四一二人でした。

◇編集も議論沸騰

どんな編集にするかも喧々の議論をしていました。委員会はいつも時間オーバー。文体は「あった・ある」調か、「です・ます」調か、数字は漢数字かアラビア数字か、ルビや注釈は、写真は等々。生活史か生活誌か、ということでも随分議論しました。一番悩んだのは字数の圧縮。申し訳なく思いながら多数の語りを入れる方を取らせていただきました。聞き書きを第一部として、五つの柱に（生活を支えた・自立へのこころざし・結婚・戦禍をくぐる・子ども（頃）コラムも含めて九十二人の語りが入りました。第二部には「寄稿」をお願いしました。八十歳にこだわ

らずに、貴重な体験や女性史としてとどめておきたい事などを書いていただきました。十六人の方々が限られた三千字にエキスをこめて書いてくださいました。第三部に「高知の女性の近現代史」「年表」高知県の明治時代以降の女性史」を入れました。硬くなりがちな部分ですが、自分達の身の回りであった出来事だけに親近感と興味が尽きません。これで「女性史」の体裁が整ったように感じました。更に、学術的価値を高めてくれたのが十四ページにもわたる索引です。高知大学の学生さんの協力をいただきました。

とうとうの決断を迫られたのが表題。「ひとくちに話せる人生じゃあない」と決めたのが入稿前の最後の実行委員会。語り手さんから出た言葉をお願いしました。言い得て妙であります。

一番早くから決まっていたのが「表紙」、染織工芸作家山本真壽さんの作品「ゆく日」。まさにびびったりの表紙と題に恵まれて「高知の女性の生活史」が輝きを増したと思えます。

◇女性史はトラックに乗って

平成十七年十二月二十七日仕事納めの日、ソーレの玄関に二トントラック



クが横づけになり三千四百冊の本が届いた時は壮観で感激でした。千冊は小・中・高等学校などを中心に寄贈し、増し刷りも含めて三千四百冊をあっという間に売ってしまった作成協力者の皆様のパワーも忘れることができません。そしてまた、八十歳を超えた方々の語りから聞き手も

元気をいただき、人が秘め持つ力の大きさに感じ入ったことでしたが、その力の繋がりと結集がまた、この一冊に凝縮したことを大変嬉しく思っております。

ふるやしげこ／男女共同参画センター「ソーレ」前館長

夏季大学事始からのあれこれ

清水 峯 雄

先日、当誌（文化高知）への原稿依頼があった、「創設期の夏季大学」のことを、堅苦しい感じでなく、というものであった。

多くの高知市立中央公民館勤務は、昭和四十六年（一九七一年）から五十五年までで、最初の二年間は係長で、あとは館長として八回の夏季大学を経験した。館長の職を離れて二十六年も過ぎた今では、往時茫茫の感である。

多くの持っている資料と記憶により書き進めよう。初代館長は片岡一亀先生（以下敬称は略させていただきます）。二代は西村時衛、三代は武田次郎。三代までの方々は過去帳に籍を置く。四代はほく。

昭和二十六年一月に開館した「高知市立中央公民館」は、二十五年に開催された「南国高知産業大博覧会」の建物（産業貿易館）として本建築で建てたもので、それは後日「公民館」にしようという高知市長の絶大な要望があったからである。そして博覧会終了後内部改装して完成した。当時としては、木造建築で大ホール

（八百席）をもつ施設としては出色のものであった。少し私事に亘るが、ほくは博覧会施設建築に市役所の臨時技術員としてかわり、「テレビ館」を設計



した。博覧会終了後は公民館の内装工事に現場監督助手としてかわった。市役所生活を振り返ると、市民図書館での十八年間を経て、移転改築問題の起こっていた公民館に異動になったのは先に書いたように四十六年。以来公民館員として夏季大学などの文化や社会教育事業のかたわら、新公民館建設に当たってきた。市役所生活四十二年間のうち三十二年間を、図書館、公民館、

県民文化ホールで勤務した。いつてみれば「文化関係事業」に携わった転業生活であった。それはもう往事茫茫とはいえず、今は懐かしい思い出になっている。

さて、夏季大学事始めから以後のことを振り返ってみよう。まずは初代片岡館長の「思い出話」からのあらましを紹介しよう。「昭和二十五年十二月に館長になったわたしは、佛然とした当時の世相を正常化することが、公民館の努めであると思ひ、最初に生まれたのが『夏季大学』であった。期間は八月の夏休み、第

一回は昭和二十六年八月一日の開講であった。日曜日を除いて八月中日、朝仕事に行く前の六時から、仕事が終わって聴講したい人には同じ題目で夕方六時からで、いずれも一時間半の講義であった。資料によると、朝と晩で講師が変わっていることもある。

第一回の夏季大学講師は三十一名。ほとんどが県内講師か県出身の講師。何人かを上げてみると、高知女子大学学長岡本重雄、この年四月に初当選した高知市長氏原一郎、県知事桃井直美、国立仁井田療養所長坂本昭高知協会牧師吉田満穂、竹林寺住職海老塚義隆、作家岡岡典夫、以下氏名のみ、宇田道隆、大町文衛、塩尻公明など。第二回は講師三十名のうち県内講師は十二名で中央講師は十八名。中央講師が人気度高く、第三回からはすべて中央講師になっている。第三回で出色のものは「政治教育特別講座」。各政党幹部の、大橋武夫、戸叶武、三木武夫、成田知巳、岩間正男の名前がある。片岡館長は「思い出話」のなかで、「いまでこそNHKなどでやっているが、当時はなかった。その頃は自由党、民主党、右社会党、左社会党、共産党で、政策を述べ、お互い討論をし、聴衆との質問応答をやって大変好評だった」

という。

夏季大学は中広い市民の興味をひく問題や、その時代の、特有の問題などが取りこまれてきている。初代から四代までの内容をみてみると、多少特色のあることに気付く。講師の選考にあたっては、設置している選考委員会の議を経るのだが、各界一流の方への依頼なので、おいそれとは決まらずに何回かの選考会を開くことになる。初代館長は優れた教育者であった。二代館長は教育者であり文学者でもあった。三代館長は俳人で美術に造詣が深かった。四代館長は、今年一月にやっと『第一全詩篇集』を出して詩人の仲間入りした平凡な人間。

初代は一回から六回まで。特色は教育面。哲学者・教育者で文部大臣をされた天野貞祐、広島大学長でちに文部大臣をされた森戸辰男等。二代は通算五回で、若かりし大江健三郎や小林秀雄等文学者十三名。南極関係で、前南極観測隊長永田武等四名。原子力関係で、ロケット博士の糸川英夫等三名。三代は通算十一回で、毎回美術関係の講師を招聘しているのが特色である。四代は通算八回で、強いて特色をあげれば、当時の環境問題、特に「公害」関係であろうか。宮本憲一、星野芳郎、高

橋暁正、和達清夫、田尻宗昭等五名であった。

第七回までは、朝、晩の順の講演であったが、第八回から同じ講師が先に晩の講演をして翌朝六時から同じ題目で講演する方式に変わっている。その朝の夏季大学がなくなったのは、会場が県民文化ホールに移ったのちの五十三年の第二十八回からで、このことは今でも残念に思っている。夏季大学の開催場所は一回から十九回までが高知城下の公民館。二十回から二十六回までが高新ホール。二十七回からは新築された県民文化ホールである。



朝永振一郎先生と

講師が来高される便（のりもの）は、第五回（昭和三十年）から高知と大阪間の航空便を使えたが、なにぶん東京からの講師が多く、乗り継ぎで不便のうえ、八月は台風など天候に左右されやすく苦労したという。第十六回からは高知と東京間の直行便を使用でき便利になったが、相変わらず天候には悩まされたものである。

講師接待で、ほくの一癖の思い出は、ノーベル物理学賞の朝永振一郎講師のこと。先生のお酒好きもあって話が弾んだ。気さくで超一流の人間味が痛いほど伝わってきた。色紙を書かないという先生であったが、その夜は気安く書いて頂いた。ところが文字ではなく、数学

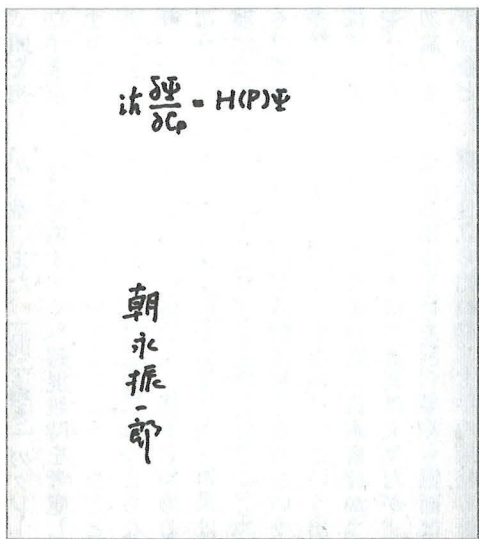
の記号の集合体のような数式で、ほくは酒の勢いも手伝って、無謀にも内容や意味について伺った。それはなんとノーベル賞を貰った業績の理論を表したものであった。いわゆる「くりこみ理論」の数式で、その時は分かったような気持ちになって、帰宅するタクシーの中で色紙を抱いて、先生が説明してくれたことを酔っ

た頭で反芻していた。不思議に覚えている一夜であった。

受講生としての一番の記憶は、二十九才の文学趣味のほくが、眩しく見上げた文学者小林秀雄講師の容貌である。ほくに託って小林秀雄は雲の上の人であって、その人を目のあたりにみた感激であった。

夏季大学の効用は、講演内容もさることながら、講師の容貌や人柄にじかに触れてのフィードバックを「心の糧」にすることで足らないうか。そういう意味からも、その道の一流の人物を招いて欲しいし、人生これからの若い人の、多くの参加をほくは期待したい。

（しみずみねお／元中央公民館長）



朝永先生に書いていただいた色紙

やなせたかし記念館・アンパンマンミュージアムはこの七月で開館十周年となる。この館はその名前のとおり、やなせたかしという漫画家の個人記念美術館・コレクションギャラリーなのだが、十年たった今でも、

田所菜穂子

固定展示の リニューアル

学芸員シリーズ⑬

テーマパークと勘違いする人がいて、着ぐるみショーや遊具を期待してきて、苦情を言われることが度々ある。中には「やなせたかしのことばかりでがっかりした」などという脱力ものも苦情もあるし、「絵なんか見たくない

んです」という孫を連れて、お祖母さんらしき女性もいた。美術館に来て、そう言われても困るが…(十周年の今年目指すのは、美術館であること

の周知を徹底することである)。このような状況で、その手の来館者のニーズに若干ながら応えている、ジオラマなどで構成する「アンパンマンワールド」を三月にリニューアルした。アンパンマンの町のジオラマをより広く低位置に展開し、覗き窓を作ったり、通路を広くした。費用約一億円は財政難の自治体にとって大変なこと、納税者である町民のみなさんのご理解に感謝である。

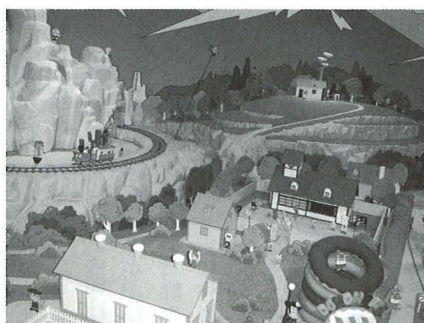
リニューアルの主因は、機械を使っていた展示品が、寿命で壊れてきて、修繕では追いつかなくなつたことだ。リニューアルの提案自体は、五年前から始めた。メーカー等がいう機械の寿命は大抵五年。まだ壊れていないが、「壊れてからでは予算が急につかない。予算取りには数年かかるつもりで早めに計画を立てたほうがいいですよ」と、手塚治記念館の当時の副館長さんからアドバイスをもらった。予算は当然簡単には認められず、一方機械は、多い入館者数も災いし、まさに五年目くらいから一つ二つと壊れ始め、この二年ほどは、半年に一回のメンテナンス後

一ヶ月持たないありさまで、頭を抱えていた。寿命は確かだった。東京からスタッフを呼ぶメンテナンスは年二回が限度だ。

で、どうにもならなくなり、今回のリニューアルとなった。こういうのリニューアルは、施工の展示業者固定展示物製作は、施工の展示業者案まかせが多いようにも聞く(開業前に設置する場合は圧倒的多数だろうから、依頼するほうも手探り状態ということもあるだろう)。今回は、展示の内容や世界観は勿論、十年間の経験にたつて、システムなどについても館側から積極的に提案した。内容は、「絵本の世界を体感する」というこれまでの考えを踏襲することとした。全く新しい路線にすれば目新しく、当座の集客効果はあるが、作品の制作理念や幼児の見学が多いことを勘案すると、アトラクション性の高い装置を入れるより、ジオラマを中心にした現状がベストと思えた。そして「機械は壊れる」を前提に、頻繁に壊れる部分やメーカーの製品製造期間を考慮し、システムの構成はできるだけ最新の技術を使わず、電気機械ものは少なくし、手動しかけにしようという方針を決めた。子供の破壊力は大変なもので、全体重かけてレバーを押し、ボタンを連打するから、単純で丈夫な造り

が一番。また、「混み過ぎ」のクレームに対応すべく「超混雑時を考慮して、滞留時間を短くしよう」などと言っていた。「合言葉は、『つまらなくしよう!』」だが、仕事を始めると皆プロ意識抑えがたく、結果は「良くなった:穴を覗いたりすると、これじゃ滞留時間は短くならない!つまらなくなつてない!!」という出来になつてしまった(自画自賛か)。リニューアル後の評判は上々だが、五月の連休を終えて、早くも壁画は傷が目立ち始めた。十年の経験も子供のパワーには追いつかなかった…。嬉しいやら悔しいやらである。次のリニューアル時には勝てるか:勝算は低い。

たどころなほこやなせたかし記念館
事務局長・学芸員



高知市文化プラザかるぽーと 4~6月の事業の(び)報告

◆高知のまんがあれこれ展

四月二十二日~六月二十三日、横山隆一記念まんが館企画展示室で「高知のまんがあれこれ展」を開催しました。まんが甲子園の募集開始にあわせて昨年までのまんが甲子園優秀作品を展示したほか、「日曜市軒先まんがギャラリー」作品や「かまぼこ板マンガ大賞」、「まんがの日記念・4コマまんが大賞」入選作品も展示し、まんが王国・土佐のまんが文化を体験していただきました。

◆2006ゴールデンウィーク まんが館イベント

五月三日~七日、まんが館来館者を対象に、二つのコーナーを開設しました。「似顔絵コーナー」では高知漫画集団と高知漫画グループくじらの会のメンバーが日替わりでまんが似顔絵を描き、来館者の目を楽しませていました。「まんがカレンダー」

では、思い思いのまんがをカレンダーに描き、楽しい思い出にしています。

◆かるぽーとミュージカル・ワークショップ

高知市文化振興事業団はこれまでに四本の市民ミュージカルを制作してきましたが、二〇〇八年二月に新たな市民ミュージカルを上演する予定です。その前段として舞台や演劇に親しんでもらうため、講師にミュージカルの分野で活躍している大原品子先生をお招きし、五月~六月にワークショップを開催しました。子ども四回コースに三十人、大人の八回コースに二十七人の参加がありました。いずれのコースも体をほぐしたり、コミュニケーション・ゲームでお互いに知り合ったりした後に、課題に取り組みました。最後はミュージカルのワンシーンをそれぞれのグループで発表し、充実したワークショップが開催できました。

◆市民の芸術の広場 『第58回高知市展』

アンデパンダン(公募・無審査)の美術展として市民に親しまれている高知市展が、五月二十七日~六月十一日まで、市民ギャラリーで開催されました。

今年、絵画、日本画、書道、先端美術、彫塑、陶芸、工芸、写真、ペン字、デザインの新ジャンルに、十六歳から九十二歳までの計五百二十一名の作品、計六百四十一点が出品されました。

また、北海道北見市から美術交流作品三十点が寄せられ、北の大地ならではの風景写真や水墨画が、高知の作品とはまた違った雰囲気を出していました。

かるぽーと開館以来、市展の目玉となつている参加・体験型の美術体感イベント「あなたダビンチ ぼくピカソ」は、前広場に設置された野外テント、公民館の各実習室と大講義室で開催され、六ジャンル七ブーに一千人ほどの小・中学生、親子連れが参加しました。参加者は玉ねぎの皮でハンカチを染色したり、プラスチックでオリジナルのキーホルダーを作ったり、石膏でカラフル

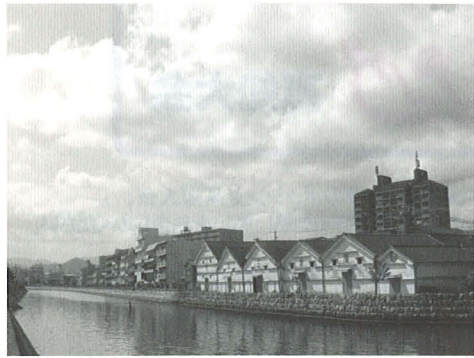
なおにぎりを作ったりとさまざまに美術体験を楽しみました。有料化にもかかわらず大勢の親子連れにご来場いただき、このイベントが子供たちや保護者に定着してきたように思います。

発表と鑑賞の場として半世紀以上の歴史を持つ高知市展は、創造者・鑑賞者の育成という新たな役割を担うべく、子供たちに美術の楽しさ・面白さを伝えていきます。

◆わいわい！ 子どもの音楽会

小さな子供を連れてまます家族で鑑賞することができる「わいわい！子ども音楽会」が六月十八日にかかるぽーと大ホールで開催されました。三回目となる今回は昨年までの鏡野吹奏楽団に加えて、地元楽団・高知フライデー・ウインド・アンサンブルが参加し、子供たちに人気の楽曲をたくさん演奏しました。

また、「指揮者にチャレンジ」や「みんなで歌おう」といった、吹奏楽では珍しい観客参加のイベントも好評で、来場した子供たちは楽しい時間を過ごしていました。



高知 遺産

薬工倉庫

江の口川の畔に三角屋根が陰を落とす薬工倉庫。無頓着な人々の手で次々と「いい風景」「価値ある建物」が消えて行く高知の街。その中に残る最後のいい風景でもあった薬工倉庫。劇団の練習場に使われたりこれまでも面白い動きがある場所だったが、この夏からいよいよ新しい graffiti が移転オープン。やっと高知にも、時間を大切にしたい場所が産まれる。
(竹村直也)



Original goods Artist goods Ticket

かるぽーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動が続いている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントの手ケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田 2-1
高知市文化プラザかるぽーと 3階
Tel 088-883-5052
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）

今号の表紙

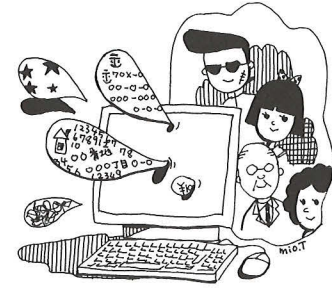
「咲」 長野豊秋
私は定年後日本画を始めて十五年になります。よき指導者に恵まれて、何回か県展に出展させて戴きました。
この絵は友人と奥山に行ったときに谷間で見事に咲いていた石楠花に出会いその美しさに心を奪われました。なんとか、その時の感動を再現したく挑戦してみました。
(ながのとよあき/日本画)



高知を撮る 戦時と平和の空間 河野 彰子

第22回写真コンテスト入賞作品

情報の保護と公開 風俗歳時記



個人情報の「保護」と公共情報の「公開」が複雑にせめぎあっている。中には個人情報の保護に「悪乗り」して、公的な悪事を隠しているケースも見受けられるし、プライバシーに余計な神経を使って、「保護」する必要のない情報まで、公開をためらっている場合も見られる。
昔、大学入学者名は新聞に出た。当時でも「補欠合格者」名は、大学も発表せず、新聞にも出ないのが常であった。「補欠入学」と「裏口入学」とが区別できない大学があったためかも知れない。その頃、ある公立大学関係者のお嬢さんがその大学に補欠で合格した。彼女の名前は新聞に出なかったのに、彼女が大学に通うのを見て、周囲には、「職員のコネ」で合格したのではないかと陰口を叩く者もいた。
「補欠」で合格したことを恥ずかし、いと思ふ人もあるだろうが、物は考えよう。不合格より補欠でも合格した方が名誉である。彼女の場合も、ちゃんと言明が出ていけば、不愉快な思いを

しなくて済んだはずである。本来、保護すべき個人情報、他人に知られると恥ずかしいことや、知られると困ることである。大学に合格したことは、恥ずかしいことでも人に知られて困ることでもない。税金で運営している国立の大学は入学者名を堂々と公表すべきである。受験競争をおおる、という批判があるらしいが、およその外れの批判である。
聞く所に寄ると、従来開示されていた「高額納税者」のリストも開示されなくなるらしい。「黒い金」でないのなら、堂々と公示すべきである。「働けど、働けど」金に無縁な人々と、世の中の「仕組み」で「自然に」懐に金が転がり込む人々がいることが分かる。警察の「捜査費」問題も「個人情報」を理由に闇の中にあるようだ。面子や世間体を入念に気にするお役所なので、隠したい気持はよくわかるが、「公」の税金の問題である。そろそろ、観念する潮時だろう。
(路)

風俗

改憲に触れて

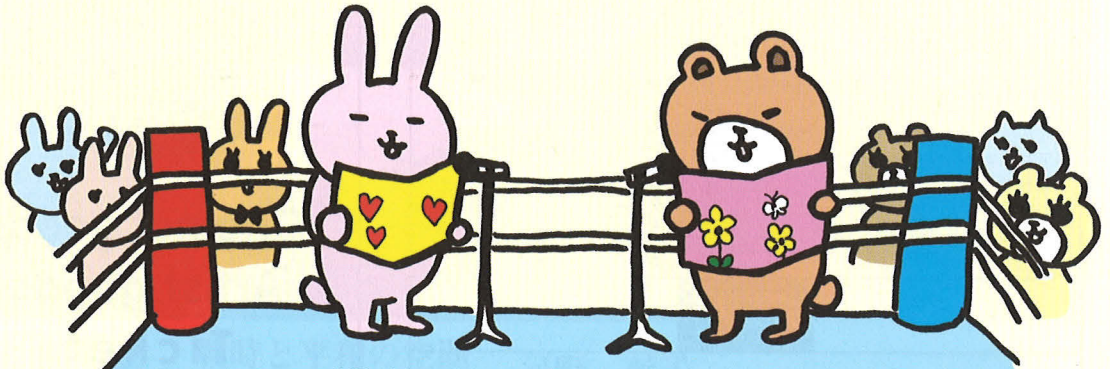
昨年十月二十八日、自民党は「新憲法草案」を発表。民主党も十月三十一日「憲法提言」を発表した。五月二十日現在、国民投票法案も近く提案の気配。いよいよ憲法改定が具体化の日程が上がってきた。平和憲法を守れという声も、日を追って熱っぽい。
九条二項を改め集団的自衛権も認めようとする「草案」に対し、反対運動の組織として生まれた「九条の会」が、県内市町村にも次々と作られている。大物講師による講演会、署名活動、意見広告への取り組みなどその活動は真摯で具体的だ。「平和憲

法ネットワーク高知」という組織も出来、先日は佐高信氏の講演会が行われた。いずれも政党や労組が前面にたつてなく、個人の主体性を大事にしようとする姿勢が新鮮だ。自主的な運動といえは、五月十三日に「サロン金曜日@高知」という市民グループ主催の「憲法改憲にももつす」という講演会があった。宣伝にも動員にも力の無いグループなので案じられていたが、用意されていた椅子が足りなくなる程の盛会であった。講師は経済同友会の幹事品川正治氏。元日本火災海上保険の社長という。経済界の成功者が「平和憲法を守れ」というのはそれだけで意味深いものがある。六十年安保闘争を思わせる民衆の胎動がある改憲阻止の行方には、目が放せない。
(3)

第5回 詩のボクシング 高知大会
Japan Reading Boxing Association Official Poetry Boxing

かるぼーとのオープン以来、毎年熱い戦いを繰り広げる詩のボクシング高知大会。
今年も予選会を勝ち上がった16名による、全国大会への出場権をかけた熱い戦いをお楽しみください。

●日時:7月22日(土) 12:30開場 13:00開始 ●会場:高知市文化プラザ小ホール
入場料 一般:1,000円 中・高校生:500円 小学生以下無料



■お問い合わせ
(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071

第5回
高知出身
まんが家展

山田章博展

— 幻想空間へのいざない —

2006年7月15日(土) ~ 9月24日(日)

会期中展示替を行います

【前期】7月15日(土)~8月20日(日)

※前期・後期とも観覧された方に、記念品として「山田章博展」ポスターをプレゼント
(なくなり次第終了)

【後期】8月22日(火)~9月24日(日)

9:00~19:00

横山隆一記念まんが館 企画展示室

●休館日/月曜日(ただし7月17日、9月18日は開館)

●観覧料*山田展観覧券*中学生以上500(400)円/小学生以下無料

*常設展+山田展セット券*一般800(640)円/中学生600(480)円/小学生100(80)円

※()内は団体料金(20名以上)/小学生未満は無料、65歳以上の方は半額

身体障害者手帳(1、2級)、療育手帳及び精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方とその介護者1名は半額。

●主催/(財)高知市文化振興事業団 横山隆一記念まんが館

関連イベント…山田章博トーク&サイン会 8月6日(日)開催!

トーク	13:00~14:00 ■場 所:高知市文化プラザかるぼーと 2階小ホール ■参加料:無料
サイン会	14:30~16:30(途中休憩有) ■場 所:横山隆一記念まんが館 企画展示室 ■参加方法:当日11:00より、横山隆一記念まんが館企画展示室受付にて先着120名様に参加券を配布します。※「山田章博展」観覧料が必要です。 ■サイン対象:「山田章博展図録」(500円税込)に限ります。(会場にて販売)

お問い合わせ先 〒780-8529 高知市九反田2-1 高知市文化プラザかるぼーと内 横山隆一記念まんが館
TEL: 088-883-5029 FAX: 088-883-5049
URL: <http://www.bunkaplaza.or.jp/mangakan/> E-mail: bunshin@i-kochi.or.jp



「十二国記シリーズイラスト」/山田章博
©小泉不由美/講談社